

金蘭会Tokyo

金蘭会東京支部会報



April. 2009 No.16

編集・発行／金蘭会東京支部（大阪府立大手前高等学校同窓会）
 事務局／阪本弁護士事務所内
 〒104-0061 東京都中央区銀座6-7-2 みつわビル3F
 ホームページ／www4.airnet.ne.jp/t-kinran/

学年だより

生活空間を豊かにゆつくりと

森脇啓子（昭和9年卒）

現在92才です。平和な文明開化めざましい頃新しい文化の雰囲気を感じて成長期を過ごしました。其の後は時代の波に鍛えられ乍ら社会生活、三人の子供も自立、人生体験を経て今は孫娘との二人暮らし、近郊に住む娘達の支えも頼りに、余り拘束の少ない日常です。年なりの体力、知力でこの生活空間をどうやって充たすか、考えています。先ず健康、食事、友との交際、外出、そして感動etcとしていきます。体力に合った自分なりの感覚でゆつくりゆつくり、行動、観察致します。

過日米、真夜中寒天の星空を見ました。その神秘的な透明度の美しさ、驚きでした。宇宙の深さを感じました。又或る早朝に太陽のオレンジ色の強い光線の、若々しい躍動感に、今更ながら、新鮮な発見、平和の大切さをもつくづく感じました。自分に与えられた残りの人生を大事に、出来るだけ感性豊かに描きたいとも思っています。

金蘭会東京支部総会私の年行事の一つで、7月初め、当日の会場への足どり軽やか、受付ではるかに年若い後輩の幹事さん達の行き届いた応対に、何とも言えない共通性に年を忘れ、心の安らぎ、至福のひと時です。

昨秋は二子玉会に、6人の同

年の親しい友と出席、元気な昭和9年会と言われました。又次の機会にも恵まれたいと願っています。

花桐の集い／会えば女学生

河野美保子（昭和15年卒）

「花桐会」では一年に一度クラス会をもっています。平成二十年十一月に小田急デパートの「なだ万」へ集まりました。私達は八十代も半ばなのですが、当日は遠く鎌倉や流山からもみえ、九名で抜けて、誰も女学生の昔に反れるのがこの会の不思議で有難いところ。集まった方々の若さに、若返る元気が湧いてくるのも嬉しいことです。話ははすみ時間のたつのの早いこと。それにしても欠席される方がふえるのは、仕方がないとは思いますが淋しくもあります。

さて次会は平成二十二年、八十八の米寿の御祝会ということにして、それまで健康に留意し、また元気に集まりましょう、と散会しました。

団塊への変貌 S41年卒活動報告

中野（丸岡）照代（昭和41年卒）

私達は、団塊の世代と呼ばれているが、その実、結束して何かをするのは得意でない。それでも、97年に東京支部総会の当番幹事を担当して以来、手探りで東京同期会の開催を始めた。

今や、開催は毎年11月末の週末に定着し、それに合わせて仕事の日程を組む人も多い。一昨年は、還暦を記念し、高崎の温泉宿で初

の宿泊同期会を敢行。大阪からの参加者も含め、20数名で、深夜まで大盛り上がり。再度開催の要望も多く寄せられている。

また、昨年の4月には大阪での還暦同窓会が金蘭会館で行われ、100余名が参加。1時から6時まで、しゃべり尽くした後、場所を替えて10時ごろまで宴が続いた。最近はその他にも、大阪でゴルフの会や新年会など有志の会が定期的に催され、広がりを見せつつある。まとまらなかつた世代も名実共に団塊へと変貌する日が来るかもしれない。

おいてまえ51

中山憲章（昭和51年卒）

S51卒の幹事年も終わり一時期の盛り上がりも少し冷めて来ましたが、一部では温泉旅行にテニス合宿と未だ余韻冷めやらぬといったところ。先日もうオーターフロンにあるK氏のマンションでちよっ

Topics/News/Information

●募集

●仲間募集…「二子玉会」

東急田園都市線二子玉川駅近辺に集まりませんか？

昨年は10月5日（日）に、昭和9年卒6名他、各年代の25名がランチを楽しみました。今年も10月に開催予定です。おひとりさま、初参加、遠方よりの参加も大歓迎です。興味のある方は竹村までご連絡下されば、追って開催日時や場所をお知らせします。

連絡先：竹村 泉（昭和48年卒）

TEL：045-984-6362

Email：426izumi-t@e08.itscom.net



●三行広告募集

出版本、個展、講演会、講習会、教室などの有料広告を募集します。

●金蘭会東京支部ホームページ

<http://www4.airnet.ne.jp/t-kinran/>

支部の最新情報をご覧になれます。メールアドレス登録もこちらからお願いします。

編集後記

名編集長退任後、引き続き加藤啓子さん（昭和46年卒）のご協力のもと、役員みなでなんとか発行にこぎつけました。これからも、皆様からの投稿など、ご協力をお願いします。ご意見ご感想ほかい合わせはホームページまたは総務・森まで。（TEL:03-3829-1548）

東京の新名所六本木ヒルズでの伝統の総会

六本木は曾て武家屋敷の建ち並ぶ地でした。その一角、長府毛利藩邸の跡地に再開発された六本木ヒルズのグラントハイアット東京で、7月6日、第84回金蘭会東京支部総会が開催されました。参加者は215名。大阪からは升谷金蘭会会長、斎藤大手前高校校長先生に来賓としてご臨席いただきました。

懇親会のメインイベントは、幹事学年梶原さんのご子息を中心に構成された「カルテット・セファランセラ」によるミニコンサート。若手実力メンバーのフルートと弦楽器の演奏は、参加者を魅了しました。

今年の総会開始時刻は例年より遅い午後4時。旧友との楽しい会食と歓談が終わったころ、窓の向こうにはネオンきらめく六本木の町が広がっていました。



管弦楽カルテットのタベ

小原さゆ子（昭和52年卒）

第84回総会は、7月6日六本木ヒルズ内のホテルグラントハイアット東京で開催されました。東京藝術大学を春に卒業した梶原一紘君（大阪在住の同期カップル、梶



この大不況の最中でも

金蘭会東京支部長 阪本 清



勤勉誠実の

日本国民が外国産悪性原材料・原油等のインフレに必死に耐えていたときに、米国発の金融崩壊の追い打ちで目も当てられない大不況に襲われています。一喜一憂を戒めるにもその「一喜」が見あたらない情勢下、企業経営



と早めの忘年会が開かれました。会場となったパーティールームはレイアウトブリッジが一望できる絶好のロケーションにあり、参加した面々もこの眺めを楽しみにやって来ます。ホームシアターなど充実した設備が揃っているのも自慢で、昨年は、新たに編集した大手前今昔物語S51バージョンを上映し30年前に

原夫妻のご子息」とその仲間の管弦楽カルテットに演奏をお願いし、215名の方にご参加いただき、華やかな会となりました。なかなか使えないこの会場を使えたのは、同期の磯井君が森ビルの役員で、私と共に幹事代表を務める川端君も同社で勤務している事からです。

事前作業によく参加できたのは



●支部会計報告（平成19年度） 平成19年1月1日～12月31日

収入の部	金額(円)	支出の部	金額(円)
前年度繰越	6,604,531	総会補助費	255,542
支部会費(内訳)	487,000	支部運営費	221,002
終身会費分	390,000	会議費	10,502
年会費分	97,000	事務所用料	60,000
		会報印刷代	63,400
雑収入	80,000	通信費	9,875
貯金利息	2,402	HP費用	22,680
		雑費	54,545
		次期繰越金	6,697,389
合計	7,173,933	合計	7,173,933

はありますが、ここから各学年、地域、趣味などの集いに及んでいけばと願っています。

も家計も緊縮節約に走らざるを得ず、それがまた経済活動の収縮を招くようです。

そんな中、昨年も幹事学年（昭和52年卒）の皆様のお力で立派な総会を持てました。会社では大勢の部下を使役している隆々たる部長さん達や、そのような夫を管理下に置くきらめく奥方達が、経費の削減に苦労しながら営々と手配を進めて下さったのです。

総会開催だけが同窓会の仕事で

タイムスリップしました。同級生同士で結婚したのはT氏とYさんだ（へー）とか、Y氏とOさんはどうして別れちゃったんだろう（ふうん）とか、みなさんこの手の話がとっても好きなんです。

続きは「おいてまえ51」でお待ちしております。写真は07年11月に行った箱根（テニスと温泉の集い）での一コマです。（おいてまえ51…S51卒のWeb掲示板です。野球、ワインから焼き畑法まで多様な書き込みで賑わっています。）

●金蘭会東京支部データ●

■会員数	2668名
女性	1225 45.9%
男性	1443 54.1%
■卒業年代構成	
～大正15年	15 0.5%
昭和2～10年	183 6.9%
昭和11～20年	161 6.0%
昭和21～30年	339 12.7%
昭和31～40年	671 25.2%
昭和41～50年	808 30.3%
昭和51～63年	409 15.3%
平成元年～	80 3.0%
教職員	3 0.1%

*数字は2009（平成21）年3月31日現在

ブドウ栽培を ワインファンとともに楽しむ

ブドウ栽培家

赤松 英一 さん
(昭和40年卒)



大阪で生まれ育つ。大手前時代から自治会や社研部で活動し、京都大学入学後は学生運動に没頭。中退後も1993年まで社会運動に従事。94年から普通に働きはじめたが、縁あって山梨県勝沼町の中央葡萄酒株式会社（グレイスワイン）に入社し、農場長としてブドウ栽培に取り組む。2007年に参与に就任。

ワイン好きの方が増えています。ワインの魅力はその色や香りや味わいの多様性、複雑さ、繊細さにありますが、それはワインがブドウを搾って発酵させただけのお酒であるという単純さからきています。品種ごとの特性をもったブドウが産地の気候や土壌、さらにつくり手の努力を反映した個性をつくり、それが醸造技術に支えられて、ワインの品質と個性を生み出すわけです。

近年、国産ワインの品質が目覚しく向上し、ワインファンの中で国産ブームがおこるとともに、日本固有の品種からつくられた白ワイン「甲州種ワイン」が世界へ進出しようとしています。こうした動きは、20年ほど前から始まった日本のワイン産業の革新の成果といえますが、その出発点になったのも「ブドウ栽培から始まるワインづくり」の実践でした。

僕はちょうどこの時期に、「第二の人生」をかける仕事として「ワイン用ブドウ栽培」を選び、一から学びながら畑を開き、ブドウの樹を植え、育て、果実の品質を高めるための工夫をするという作業を続けてきたわけです。

この仕事はいまも継続中ですが、還暦を過ぎ、参与とい

う役職になった今は、一般のワインファンとともにブドウを栽培する「グレイス栽培クラブ」の活動に一番力を入れています。年間を通して、月に1〜3回ほど土曜、日曜の作業日に勝沼の畑に通ってブドウの世話をし、4回以上参加すれば収穫したブドウでできたワインが1本贈呈されるという組織で、首都圏を中心に名古屋や沖縄からも参加する百名以上の熱心な会員がいます。

会員のみなさんにとっては、ワインをもっと知るためにブドウ栽培を体験してみたいという軽い気持ちで始めたものが、自然の中で働く「農」の楽しさを知り、利害関係を越えた楽しい仲間と出会い、より高品質なブドウワインをつくるために努力するやりがいを感じて、今では生活の中で大きなウェイトをしめる生きがいになっているようです。同時に社会的にみれば、農家の高齢化・後継者難で悩む日本の農業・農村の危機を克服していく役割の一端を担いつつあるといえるでしょう。

【なお一昨年、昨年の2回、金蘭会セミナーで「ワインの話」と題して講演した内容が金蘭会のホームページに収録されていますので、興味のある方はご覧下さい。】

から「かっこいい」と言われてうれしかったです。

―大手前時代は？

映画一筋でした。映画関係の仕事に就きたいと思って、毎日映画関係の本ばかり読んでおりました。

―お父様は大手前の生物の山本偵策先生ですね。

在学中は毎日、すごく変な感じでした。卒業シーズンに父親が授業中に「贈る言葉」とかを歌っていたように、ちょっと恥ずかしかったです。父はほんとに歌が苦手なはずなんですけど。母はいつも歌を歌っており、今もコーラスをやっています。両親ともに音楽を聴くことが好きでした。

―サラリーマンと歌手の両立の秘訣は？

まだ慣れておらず、その難しさを実感する毎日ですが、あえて言うなら「気持ちの切り替え」でしょうか。月々金は会社員、土日のどちらかは「歌手」そして「お父さん」。その切り替えをはっきり意識することで、メリハリをきかせられると思います。今年もそのバランスを崩さないよう、頑張ります。

【山本偵策先生には今年の総会案内状をお送りしました。】

家族と共に 紅白へ

社員兼歌手
木山 裕策 さん
(昭和62年卒)



昭和43年10月3日生まれ。大阪外国語大学（現大阪大学外国語学部）イスパニア語学科卒。子供が四人いる会社員。大学時代に音楽サークルでバンド活動を開始。2008年2月6日に家族愛をテーマにした楽曲「home」でデビュー。

―2008年の紅白歌合戦の出場、おめでとうございます。経緯について教えてください。

きっかけは36歳の時に喉の手術をした際、「手術後に声がでなくなるかもしれない」と言われたこと。その時

に、もし手術が成功したら昔からの夢だった「歌」への挑戦をしようと誓いました。その後、オーディション番組に応募し、家族愛をテーマにした「home」という楽曲で2008年2月6日にデビュー。会社員生活を続けながら、たくさんの方に「home」を届けたいという思いで、週末に全国をキャンペーン。その結果、「紅白歌合戦」に出場することができ、本当にありがとうございました。

―紅白に出た感想は？

とにかく緊張しました。紅白は「観る」もので、自分が「出る」なんて考えもしていなかったですから。でも、応援してくださった皆様への感謝の気持ちを込めて歌いたいという一心でステージに上がりました。家族が会場に来てくれていたのが心強く、時々、会場の家族の方を見ながら歌いました。紅白に出場したことへの反響も大きく、たくさんの方からメッセージを頂き、本当にうれしく思っております。

―紅白では、一番下の息子さんは眠ってて、かわいかったですね。歌に関しては家族全員が応援してくれています。長男

都心の川をカヌーで巡る

森 正雄 (昭和44年卒)

八百八橋を誇る水都大阪にひけをとらず、東京も川と橋に溢れている。家康の江戸開府以来、幕府は都市基盤整備のため、川の開鑿や付け替えを行って来た。しかし近代東京の急激な都市化に伴い、埋め立てられたり、高速道路で上空を塞がれてしまった川も多い。そのような川の一つである日本橋川をカヌーで周遊すべく、5月の連休の或る日、同好7名、5艇

のカヌーで江戸川区の大島小松川公園を出発した。

最初の川は小名木川。都営地下鉄新宿線に並行するように東西に流れている川の東半分は所謂江東ゼロメートル地帯で、過剰な地下水の汲み上げによる地盤沈下のため、西半分より約2m水位が低い。この水位を調整するのがパナマ運河方式の扇橋閘門である。事前に東京都治水事務所と連絡を入れていたので、信号に従いスムーズに閘門を通過することができたが、

5艇のカヌーのために水門の開閉をしてくれたのは感激した。

小名木川から隅田川に出ると川幅が広く、風波が強くなる。沈まないよう艇の安定を保ちながら、左岸に鎮座する松尾芭蕉の像をあとに隅田川を下ると、ライン河の吊り橋を模した清洲橋の深い青色が目前に迫る。船舶に注意しながら左岸から右岸に航路をシフトすると永代橋の手前、日本橋川河口に達する。

日本橋川に入ると打って変って

Member's Voice Tokyo Kinrankai

俵萌子さんを偲ぶ



俵萌子さんが、2008年11月27日、肺炎のため逝去されました。俵さんは、産経新聞記者を経て、社会評論家、作家としての活躍のほか、日本初の準公選で中野区教育委員を務められたり、陶芸塾を主催されたりなど多才な活動をされてきました。支部総会にもよく出席され、一昨年椿山荘での総会では飛び入りで発言もされました。4年前の支部会報12号には、「昭和20年の大手前生活」という題で寄稿して下さいました。心より

ご冥福をお祈り致します。同期のご友人、武田さんから、故人の思い出を寄せていただきました。

● ● ●

昭和23年卒「金桐会」東京同窓会ではほぼ毎年開催している。俵さんは忙しいときもよく出席して下さいました。だが昨年の会は緊急の検査が入ったとかで欠席。私たちはいつものように楽しいときを過ごしながら、全員何故か俵さんのことが気になっていた。

ここ数年の彼女はとても元気で、乳がんを患った経験を活かし、がんを患った人の心と体のケアをサポートしようとして様々なボランティア活動にがんばっている様子だった。自身の苦しい闘病から立ち直り、そこからさらに社会に役立つ活動へと進んでいく素晴らし生き生きに圧倒される思いで彼女の活躍話を聞いたものだ。卒業後六十年経て様々な経験を積んだ同

窓生の集まりは、俵さんの出席でさらに視野が広まり、毎回とても楽しい集まりとなっていた。

11月27日、俵さんの訃報が届いた。あんなに元気だったのにという思いと、同窓会での不安が現実となった悲しみが交錯し、今もって心の中の深い喪失感を拭えないでいる。

昨年夏ごろだっただろうか。彼女から『70代三人娘、元気の秘訣』※というタイトルの一冊の新書版が送られてきた。その第三章で彼女は「ひたひたと打ち寄せる達成感の波」という一文を書いている。病気を克服し、赤城の山に美術館と全て自分でレイアウトした広大な庭を作り上げ、老後の資金も十分準備できたとか。加齢と共に「怖いもの」が段々と減り、今は「不思議な幸福感」に包まれていると言っている。今この文を読み返してみると、彼女の遺言のよ



右端が俵さん

うに思え、俵さんは幸福感に包まれて亡くなったと確信が持てるようになった。心からご冥福をお祈りしている。

武田政子 (昭和23年卒)

※講談社＋a新書『70代三人娘、元気の秘訣』(俵萌子、吉武輝子、樋口恵子)



進行ルート、写真は左より日本橋、聖橋、扇橋閘門

を刻印した石がある。一ツ橋を見上げると、共立の女学生が楽しそうに喋りながら歩いている。やがてJR中央線のガードをくぐり、神田川へ。左手には小石川橋。後樂園が近いめか人出も多く、どこからかカレーの匂いが漂ってくる。JRの線路を右に見上げながらゆったりと川を下る。水道橋から聖橋までの神田川は緑も多く、都心とは思えないほどの静寂と美しさに満ちている。JRお茶の水駅を下から眺め、聖橋を過ぎるとメトロ丸ノ内線の赤い車両が頭上を横切っていく。しばらく行くと色とりどりの屋形船が川の両岸に係留されている。神田川の最後の橋、柳橋に着いた。

再び隅田川に出ると先ほどより波が高くなっている。ちょうど上流から遊覧船が下ってきて、大きな波を立てる。波の山に直角にカヌーを保ち、遊覧船に手を振りカヌーのシャッターを切る。両国橋の上には都鳥が舞っていた。